

西村山地区の県立高校の再編整備計画に係る地域説明会
＜寒河江市会場＞ 記録概要

- 1 日 時 平成23年1月19日(水) 19:00～20:45
- 2 場 所 寒河江市総合健康福祉センター「ハートフルセンター」
- 3 出席者
地域の方々 102名
県教委 教育次長、高校改革推進室長、高校教育課課長補佐、
高校改革専門員、高校改革主査
- 4 内 容 室長から再編整備計画の骨子の説明後、質疑応答
- 5 質疑応答概要
(質問・意見)
 - 人口減少の視点だけの「数合わせ」を目的とする再編整備計画であるという印象で、雇用情勢の動向やあるべき日本の姿の視点も入れて検討がなされたのか疑問だ。
 - 農業については、県で農業生産額3,000億を目指している。専業農家でがんばっていかこうとする生徒への農業教育を考えると、再編整備計画にある農業教育で十分な教育ができるのだろうか。
 - 農業教育では実習が重要であり、実習を通して気づき、考え、実行することを学ぶことができる。そうした学びをするから、高校を卒業してすぐに就農することができる。
 - 現在の農業校舎の実習地へ移動して学ぶことは、移動時間がかかることから、十分な実習時間を確保できるのか心配である。
 - 総合学科での科目選択による農業教育では、農業の基礎・基本の知識や技術を身につけることができるのか心配である。
 - 十分な農業教育がなされないと、生徒に農業の担い手を目指してみようとする気持ちが芽生えるか心配であるので、今後さらに検討していただければありがたい。

(県教委)

 - 農業は本県の基盤産業であり、農業の担い手育成は重要な施策の一つと考えている。
 - 高校教育における農業の担い手の育成については、3年間で完結したものと捉えないで、担い手になってからも学び続けることができる基盤をしっかりとつくることが重要であると考えている。
そのために、高校3年間では、基礎・基本の知識・技術、技能をしっかり身につける教育を展開する必要があると考えている。
 - 総合学科では、実習も含めた農業科目の開設など、現在の農業校舎の農業教育に準じた科目配置は可能であると考えている。他県の総合学科においても農業教育を展開している事例が多くあることから、先進校の事例も参考にしながら教育課程を検討していきたい。
 - 中学校で、農業の担い手を目指すことを決めかねている生徒が、総合学科では、入学後に将来の職業や進路をじっくり考え、農業を目指す目標や目的を持って、農業の学習をスタートすることができる。
 - 本県では、生徒が通学できる範囲に様々な学科やタイプの学校を配置してきた経過がある。
 - 総合学科という新たな学科を、国が制度化した背景には、今後の少子化を踏まえ、地

区内に様々な学科やタイプの学校の配置が困難になることや、学校規模の縮小が教育の質の低下につながらないようにという考え方がある。

- 県産業教育審議会においても、少子化に対応した専門教育のあり方として、単独の専門高校、複数の学科を併置した高校、総合学科の系列での学習、という三つのタイプで専門教育を保障する必要があるとしている。
- 当地区の専門教育については、県産業教育審議会答申を踏まえ、学校の小規模化による不安材料を最小限に留めながら内容的な充実をどのように図るかという視点で検討しており、単に人口減少だけを捉えて結論に至っているわけではない。

(質問・意見)

- 上山高校と上山農業高校が統合してできた上山明新館高校のこれまでの経過を考えると、どちらかといえば普通科に重きを置いて学科設置がなされている印象がある。
- 寒河江工業高校が、今回1学級減になるということで、工業高校としての特質が薄れていくのではないかと心配をしている。
- 企業で人事を担当した経験があるが、大卒社員は技術が身につかず苦勞したことがある一方で、高卒社員はやる気もあってどんどん成長する姿があった。
- 寒河江工業高校は、1学級減にしないで、4学級の維持をお願いしたい。また、校舎が築47年を経過しており老朽化しているので、校舎の全面改築をお願いしたい。

(質問・意見)

- これまで、2回の地域説明会に参加し、検討委員会もずっと傍聴してきた。冒頭「数合わせ」の再編整備という印象があるという指摘があったが、わたしも当初は同様の印象を持った。
- しかし、「キャンパス制」という新たな考え方が検討委員会から提案され、そうした検討委員会からの提案を踏まえた再編整備計画が今回示されている経過を考えると、「数合わせ」という発想だけで計画された再編整備計画ではないと考えている。
- 谷地高校に設ける医療・看護コースは、資格を取ることを目的にするのではなく、医療・看護系の進学を目指すコースと理解しているが、高校で資格を取りたいと考えた生徒が山辺高校に編入できる制度を整備してはどうか。
- 農業校舎における農業教育は伝統があり、これまで有為な人材を育成してきたことを考えると、今までの農業教育をどのように継承していくのか、地域の農業の特色を活かした教育がどのようになされるのか、わかりやすく説明した方がよいのではないか。
- 西村山地区の学校数を減らさない方向で「キャンパス制」を導入した再編整備計画は、高く評価したい。
- 検討委員会でも地域の経済と高校の存在が大きく関係するという指摘があったので、各市町村の職員や議員、地域の代表の方々との意見交流がもっとあってよかったと思う。

(質問・意見)

- 平成25年度からの各高校の校名はどうなるのか。
- キャンパス制はいつまで継続されるのか、また、学校の統合の時期はどうなるのか。

(県教委)

- 平成25年度のキャンパス制導入による学校名の変更はない。
- キャンパス制が導入される平成25年度以降も学級減は必要であることから、1学級規模の学校になることも想定される。その時は、法的に分校扱いになるので、本校と分校の関係でキャンパス制がなされることになる。統合の時期については、白紙である。

- キャンパス制の継続については、キャンパス制によっても学校の特色の維持が困難になった場合、統合についての検討が必要になると考えている。
- 魅力ある学校づくりを進め、生徒が集まる学校運営が大切であると考えている。
(質問・意見)
- 平成 25 年度に果樹園芸科が募集停止になっても、2、3 年生の教育環境はきちんと確保してもらえるのか。
- 農業校舎は、現在は本校と連携・交流しているが、左沢高校との連携・交流はどのようになるのか。
(県教委)
- 寒河江高校農業校舎の平成 23 年度、24 年度の入学生は、卒業まで農業校舎で学習し卒業することになる。
- また、入学時に示したカリキュラムを踏まえ、卒業までしっかりとした農業教育ができる教育環境を確保したいと考えている。
- 平成 25 年度以降は、左沢高校総合学科で農業系列を選択した生徒が、農業校舎の実習地等を活用しながら農業の学習をすることになる。
- 左沢高校との連携という意味では、農業校舎のこれまでの農業教育のノウハウを、左沢高校総合学科の農業系列設置の準備に反映させていきたいと考えている。
(質問・意見)
- 出張授業というのはどのようなことを想定しているのか。
- 平成 25 年度の農業校舎募集停止後の、学校施設の活用計画はどのようになるのか。
- 寒河江工業高校の校舎も農業校舎と同様に老朽化しているが、その中で教育を継続していくのか。
- 「学科」であることをやめることによって、学校運営の予算は、どの程度圧縮されるのか。
- 出張授業は相当経費がかかることが予想される。一方では経費をかけ、一方では経費を圧縮するというのはどのようなバランスなのか。
(県教委)
- 出張授業とは、キャンパス制を組む学校の教員が、相手校に出張して授業をすることを想定している。例えば、美術の教員が二つの学校の授業を受け持つということである。
- これまで寒河江市、地域の方々、同窓会等からの協力をいただきながら支えられてきた農業校舎の実習地は、募集停止後も活用させていただきたいと考えている。校舎については、老朽化しており、耐震性がある集会室については、有効に活用していきたいと考えている。補強をしても耐震性の確保ができない建物については、解体する方向で検討が必要である。
- 農業校舎の利活用の詳細については、農業校舎教職員も含めた今後のカリキュラムの検討の中で検討していきたい。
- 寒河江工業高校の校舎は、古いもので昭和 38 年に軽量鉄骨 2 階建てで建設されている。校舎の老朽化の課題は認識しているが、校舎の改築等については、キャンパス制導入後の状況も踏まえながら、検討が必要であると考えている。
- 経費に関する資料は持ち合わせていないが、教育に関する経費を生徒一人当たりで計算し学科別に比較した場合、普通科を 1 とすると、農業科は約 2.4 倍程度、総合学科は約 1.2 倍程度の経費を支出している。

(質問・意見)

- 平成 25 年度から、寒河江工業高校を 1 学級減にするのであるから、寒河江工業高校に果樹園芸科を設置した方がよいのではないかと。
- 農業校舎の実習地を活用するということであるが、実習地までの距離は、左沢高校より寒河江工業高校の方が近く、時間も経費もかからないので、再考して欲しい。

(質問・意見)

- 農業校舎の歴史は、他の農業高校とは違う要素を含んでいること、また、これからの日本、山形の「攻めの農業」を担う人材の育成を考えると、農業校舎は募集停止ではなく、山形県立農業大学の付属校として位置づけて存続させていくことを提案したい。

(質問・意見)

- この再編整備計画は、各高校は了解しているのか。
- 教育の改革は、人数やお金ではない。教育には理念と哲学がないとだめだと考えている。
- 内村鑑三や新渡戸稲造の教育の理念が農業校舎にはある。そうした教育理念を踏まえた教育機関がなくなることを懸念しているので、計画の再考をお願いしたい。

(県教委)

- この再編整備計画の骨子の公表に当たり、四つの高校の校長に説明している。
- この計画の推進においては、西村山地区の魅力ある学校づくりを目指し、様々な課題に対応することが必要だ。
- 各高校の校長、先生方が、西村山地区に学ぶ生徒のよりよい教育環境を整備するという理念を共有し、これまで各校で培ってきた教育実践を十二分に活かしながら、よりよい学校づくりに力を合わせることを重要であると考えている。
- こうした考え方は、各校の校長にも理解を得ていると考えている。

(質問・意見)

- 農業校舎は、この計画の再考を求めているのではないかと。

(県教委)

- 農業校舎の農業教育を支えてきてくださった卒業生からは、本計画では納得できないという意見をいただいている。

(質問・意見)

- 自分の息子は農業校舎にお世話になり、伸び伸びした教育環境の中で育ち、現在は大学に進学している。
- 中学校の生徒の状況は、学校生活に積極的な生徒がいる一方で、不登校経験がある生徒もいるなど多様である。生徒の多様な状況を踏まえると、色々な教育の機会を確保しておく必要があると考えているので、農業校舎のような学校は残して欲しい。
- 小学校や中学校の統合も議論されているが、小規模校をなくしていくことはよいこととは思わない。費用がかかったとしても山形らしい教育として残して欲しい。
- 農業校舎で学んだ生徒が、農業の担い手になっているわけではないが、農業教育を通して育まれた「生きる力」は確実に身につけていると思う。
- 各学区に、こうした学校が一つずつはあってよいと思うので、小規模校を大切にしたい。

以上